

SHIDA

No 21

DEURA YAMA

吉岡 信子 1

甲武信岳

碓 清人 4 5

松の山行歴

中野 善雄 6 7

丹天遠望

浅井 俊明 8

詩

磯島 恵子 9 15 24

伊豆棚場山と雨無妙峠

渡辺 果代 10

山の印象

阿部 早苗 11 12

山と仕事と

吉岡 信子 13 14

山でバテルとレラこと

久保田 治 16 20

花 足立 久子 21

私序初め之登った山は 脇 美英子 22/23

新ハイに入会して 内田 栄子 25/26

登せられた山 佐々木 美穂子 27/30

穂高と焼岳 中山 一重 31/33

奥から面へ 中村 嘉宏 34/36

三千メートルの足跡 奥野 昌 37/40

白山とある灯話 中山 一重 41/43

檀が川の山 鈴木 国之 44/47

彌果後記と指題 48

OTCORA YAMA

私は知った

あんなにすばらしい山の あることを

私は初めて見た

あんなにすばらしい 世界だ

こんな事 書く私さ 笑ゆほどで

青い空、白い雪、山の凸凹、

そして、そして……

あゝ もう書けぬぞ

ととも書き尽せぬぞ

一度でいい 見せたい所

お父さんと お母さんに

あの山々

今も光っているかしら

# 甲武信屋

礎 清人

四、五日前、急に思い立ちやつて来た。今日のコースは昨年五月の支那山行で下ったコース。バスは秩山止りの為、梓山迄歩く。梓山から戦場ヶ原迄の農道歩きは、時間にして一時間位だったが以外と長く感じられた。戦場ヶ原から十文字峠迄の八丁坂の急登は、早いきれがあんむんとして不快だったが、十文字峠では早咲きの石楠花が可憐な花を咲かせていた。

峠からは樹林の中の苔むした、本当に奥秩父らしい、シッとリとして落つたコース。道は大山、武信白岩を経て一等三角点の置かれてゐる三室山へ着いた。この登りで男性6人の今日初めてのパーティに合う。三室山から一寸した急登で甲武信屋へ着いた。自分一

人だけの山頂。ケレンの前に陽王、おろす。金峰、四節と遠いてくる主服後正路にも、誰の姿も見えない。しばらく居たが荷が著しく降り眼下に見える甲武信小屋へ向けてかけ下った。小屋でその晩の泊りは、若い小屋番と自分の二人だけ。夕方のラジオニュースで神田で学生三〇〇〇人と感動隊とが現在衝突中で、神田一帯は強然としてゐることを伝えていた。

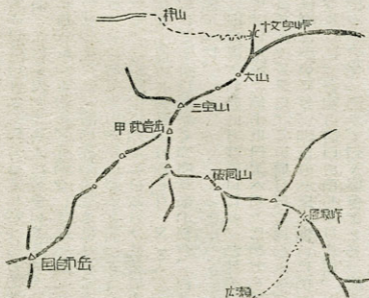
翌朝、小屋の窓から御来光を拝す。朝の二ユー入で昨夜の衝突で学生46人が逮捕されたことと聞いた。小屋番と、奥秩父にも縦横に林道が走り、未年には国師岳と大丸の間に林道が横断することや、宿毛者もこゝ数年横ばい状態であることなど、一時間位懇笑した後お世。小屋からは、樹林と石楠花の尾根道。笠平、破嵐と一足にとびし雁坂峠へ着いた。雁坂峠の午前で、5人のワンブルパーティに合う。今日は土曜日だ。

峠では空を行き来する雲を見ながら、日当りの良い斜面で二時向近くもいた。別に何も考へはなかつたし、又考へたくもなかつたが、此の片端では常に何かしっくりとしは無い、とりとのほい雑念が存在していた。峠からの下り道、前方には淡い霧の中に乾徳山から黒金山の後線が大きく見えた。

途中三パーティほどに合う。沢音を足下に聞きながら新緑の木々の下の道を下り玄稜へ着いた。バス停前の食堂でバスを待ちながら、一人ビールを飲んだ。こんな時に、単独行のさびしさを感じる。無性に人恋しさと雑念が、終始付きまとい山行だった。

(昭和44年5月23(24)日)

単独



# 私の山行歴

中野 善雄

私が最初に行つた山は伊豆岳、武甲山。穂積へ来て2年目の年に、長崎の學校で先輩だつた人に連れられて行つてもらつたんだが、確か秋だつたと思つた。日記を出してみたら、11月2日、3日、4日と文化の日まはさんで、2泊3日の行程であつた。

吾野から2日目の鶴沼予定地、正丸峠を指し、子の確現、伊豆岳と汗まかきながら歩いた事や、伊豆岳山頂の人の多いのに驚いたり、男女のグループを羨ましそうに横目で見ながら、鎖場を物珍らしそうに降りた事や、覚えてゐる。最終日、武甲山の頂に立つて、まゆりを見渡し、豊取山を指して、何時かあの山にも登ろうと思つたが、今だに実現してない。

寮に帰つて来て、山歩きってこんなに見持のよいものかと、自分ながら思つたものである。と夫に見知らぬ人と操意いざまにこんなちゆゆと挨拶を交す清々しさには（時に女性のグループ）一種の感服を覚えたりしたものだ。この時から山歩きに興味を持つようになった。其後も山に行きたいという気持ちがあったが、連日との休みが合わず、又一人で行くにしても引込屋敷で方向音痴の自分、自信が無かつた。

山の良さも忘れかけていたが、去年の11月やはり先輩に誘われ丹天へ行つた時から又よみがえつてきた。この時は雨に降られながら夜道も歩いたが、駒止の小屋に着いた時はホツとした。翌朝は前日の雨も上り快晴、ハイビツと塔ヶ岳まで行き昼食をとる。最初は丹天で昼食をとる予定であつたが、前日の雨で遅れた為、ヤビツ峠へ下る事にしたが、切角まで来て丹天へ行かずに下るのは惜しかったので、先輩が食事の用意をしている向

に既定で塔ヶ岳、丹沢山を一時向て往復、景色も見る所ではなかつたが、壱ヶ場から見た富士山は美しかった。その後二度程丹沢へ行き、一度は密ヶ峯へ下った。途中二人に逢つたきりで少マじ細かつた。この時丹沢のみやま山荘で隣に枕を並べて寝た人と親しくなり写眞を撮ってもらつたりして、現在各人が行つて来た山の絵葉書と文面をしている。

そしてこの夏想いもしなかり北アルプスへ行く事が出来た。上高地に入り梓川の清流の冷たさ、グーツと迫ってくるような高い山々、初めて踏む雪梁、グリーンと柔たゆ、嬉しかつたが、乗しかつたが、それとも待望の女の子まじえたグループで行った為か、この所の山行は全然さうなかつた。(夜れ目がつた。)まだ素晴らしい一言につまむ山行であつた。

それに11月の蓼科と北八ヶ岳の縦走と、行つた山、並つた山は少いがそれなりに想い出がある。まだ若い今の内に、沢山の山に登

つておこうと思つてゐる。今度はゆつくり景色を堪能がら

最期に文中に出て来た先導も一先さしこの山行に参加してもらおうと思つてゐる。





# 丹沢遠望

浅井俊明

五、六年前はよく足を運んだ丹沢も、昨年夏、沢登りにでかけて以来ごぶさたしている。最近は遠くから眺めるだけである。

出勤途中、我家から駅に至るまでの間、真正面にみえるのである。といつても、年中こ水ができるわけではない。冬、今朝は大分冷えこんだ日あと、いやいやふとんから起きだしてみると、雪化粧の富士山を後にひかえさせて丹沢連峰がでんとがまえている。秋に帰ると、丹沢はちやく／＼顔を出し始める。そして年々越すと、時々雪まがぶるようになるが、それも二、三日で消えるようである。そして一番雪が深くなるのは、どうやら三月のようである。

以前、中区に住んでいた頃も、丹沢を眺め

ることができたが、一昨年保土ヶ谷区に移って一層近くに眺められるようになった。日曜日の夕方、銭湯へ行く途中、夕陽の中に富士と丹沢のシルエットは何度もみかける。

昔は東京からも遠くの山々が見られましたが、今や公営のため、富士山がみえるのは年に二、三回、その時には新聞に写真が掲げらるほどである。幸いにして、横浜の郊外である我家の付近は、まだ公営は発生していないので、丹沢山塊を見物する楽しみを味わうことができるのであるが、果してこれがいつまで続くやら。

雪の丹沢を見ていると、陽春残雪を踏んで静かな丹沢を歩いてみたい気がするのである。

山のことぞ 考えているだけで

世が 晴される 私

たとえ おこっている 時ぞ

悲しい 時ぞ

あの ハイマツの 横足踏を

上から下まで びしょぬれに降りながら

雪を 脱け ことぞ

山小屋の 鈍いカントラの光を

覗い出すだけで 笑顔までりもどす

私

山は 鈍りはしない どんな時ぞ

私の体には ぴったりと ついていて

喜びと 巾かちあい

悲しガッたら 慰めてくれる

山は ぬれぬ 私にとって 靴いもの 口の 元

すくめの 髪を

つぎこんでも およばないほどに



# 伊豆桐場山と南無妙峰

渡辺 歴代

ガイドブックや山の本を読まぬ時、いつも『人のあまり行かぬ山』とか、『静かぬ山』とかいう文學を見ると、ついで／＼行つてみたくなる。この山も南無妙峰という名前と寂しいと云う形容詞に引かれて、行つてみる事にした。

修善寺から満員バスにゆられて船原峠で降りる。一息入れてやつと人出地が着いてから草地の中を歩き出す。振り返ると蓬磨山や山腹を自動車道で寸断されて、無残な姿を見ている。それにはきかえ、桐場山に登る人も少ないらしく、登山道にも草がはびこっている。元来有名になると人の手が加えられ過ぎていて面白くない。こゝはあまり知られていないせいかな自然そのまゝである。こんど山

をみつけた時、私は一人でニンマリ笑う。そんな山行を望むにいと思ふ。

草地を過ぎ雑木止めけるとまた草地に降り、ほどなく山腹に上る。頂上といつても草深く北の方しか展望は得られぬ。秋というのに日差しが強く、日影をさがしてのんびり寝ころぶ。

頂上から南へ、ススキを分けて下る。まっ黒くのヤブこぎ。腕や腰が傷だらけに落ちてしまった。前を行く人の姿も見えない。

頂上には西行豆の海が思えるまうだけど、こうヤブが深くては腰の上の空しがみえぬ。しばらく下ると道は平らになり、ススキにおよぬれの中に石稜が一。石にははつきりは読めないが南無妙法蓮華経と刺してあるらしい。こゝが南無妙峰である。何のいぬれがあるのかは知らないが、とても静しい峠である。そこから土肥温泉に下る道は途中からはつきり静しいので又もとの船原峠へもどりました。

# 山の印象

阿部 早苗

例年に居い、ひと月に三度の山行は私をか  
なり豊びた。湯ヶ原・幕山の御来迄にはじま  
り、支那山行の大倉高丸、それ会社に仲間  
との戸狩スキー。どれも天候は上々で最高ノ  
今もそれ／＼の想い出が楽しく甦る。

朝の印象……幕山・大勝日から頂上にテン  
トと登り、海から登る初日を待ちかまえてい  
たが、定刻6時5分には桿の音がした。ガア  
時過ぎ、今まで日の出のジヤマをまわして、灰  
色の雲の上が白みはじめ、遅くはなつてごめん  
ゆとばかり顔じゅうを赤らめながら、太陽は  
ゆっくりと上ってくる。じっと見守って上り  
きった時、ほつとしたようなうれしさがある。  
日の出の爽快さはこの瞬間にあると思う。

元日、心さえ晴れる気がする日の出に、朝  
をしま／＼と感じる。初日はまさに一年の夜  
明けであり、思いも自然に広がってゆく。

午後の印象……大倉高丸・水ヶ原次、麓走  
・絶景。はじめづくしの山行だったが、そ  
の新緑がずおもしろさを増さすに違いない。  
特に終始のどのに南アルプス、富士の景  
観は素晴らしい。しかしこの様な絶景に  
比べ、ダイナミックさは劣るかも知れないが  
、私は陽も入介懐いた頃の甲府盆地を忘れる  
ことができない。黒い山々に縁だら水、もや  
の中に静かにおさまっているこの盆地はまる  
で湖のようだ。夕日が湖面に輝かないのが不  
思議な程。その面は平らで、下に町があるこ  
とさえ忘れてしまう。その時、私は今日の山  
行を満喫できたと思ふ心ざーばいだった。ま  
た山へ行こう。何が私にどう思ひ立にせよ。

雪国、夕方の印象……戸狩スキー。周囲に

高い山も見えないし、樹氷や霧氷があるわけでもない。でもゲレンデのどこからも、ゆるやかに蛇行している千曲川がのぞめる。大きなロツツの代りに民舎が並び、ニューファシヨンのスキーヤーに代って土地の小學生が私の横をスイスイと通り抜ける。これが一口に言った戸狩である。このあと私のほじめのスキーでの滑った、転んだを苦く覚にもならなないので、一日のスキーを終ったところへと話まもってゆくことにする。

昏片の仲間がゲレンデからスキーをはいにまき帽へと向うが、私はビギナー、歩いた方が早いとばかり、ガンと板をはずす。スキーをかっいで雪道をブラリブラリ、前方には何山だかわからぬ山々が、星は墨絵のようだったのが、今は北斎の赤富士を想い出させる程の淡いピンクに染まっている。半分雪路し、ましてある家のタビの白いがすき版にひびく。

五分程の道のりだが、この時ほど、雪国を強く感じることはない。どのように？、志

葉では表ゆしにくいが、とにかくイメージにピッタリといったところだ。雪国に居る自分を肌で味わった瞬間だった。

それ／＼の山行の印象は、山の高低、北方により異なり、私の心に残っている景色もその方向も色彩も違う。その中で一っだけ、太陽の輝きだけは共通している。その太陽は素直な景色、快よい日だし、暖かさを我々に与えてくれ、朝・昼・夕を抜群に染出し印象をさらに強いものにしてくれだ。山と太陽、この言葉の組合せが無数の曇麗、印象、想い出を生み出し、山をやりはじめた私には、ほおさらに山を感懐をこそわかれるのだ。

山の印象は、自持的には太陽の印象とも色えるのではいまいだらうか。

# 山と仕事

古岡 信子

二、三年前に急に山を歩み出した一つの動機に、会社生活がありました。山のある事を意識し、山に登る喜びを意識し、山仲間の人々を認識する時、会社生活の苦しさも意識せずにはいられません。

一度はこの事について書いてみるつもりでしたが、今のこの機会を逃がしては二度と書く機会はないだろうと思ひ立ちました。旬故自ら半年前に上司が転勤し、又私の仕事の内容も1月中旬から変わり、山を歩かなくなればいられなくなつた、あの時の状態が、今日全く消えようとしているからです。

仕事は好き。けれど会社は嫌い。これが正しいこの向きでの私の姿です。今私から仕事を

取り上げられ、気が変になるのではと心配する位、仕事に面白さを感じていました。けれど会社の仕事に対する厭しきは、女子職員にも片居りの精神的重みとほつてのし、がかり、圧倒感でキニウキウウの、そんな会社生活を送っていたのです。

悪い例ですが手取り早い話、同じ会社に所属する新ハイのわずかの仲間の中で、三人もの退職者がいる事を思えば、おおよその見当はつけて頂けましょうか。どうせ止める日は早い方が良くと後輩には寛大に気持ちを押しつら、私自身はとうとう今日まで来てしまつたのです。

自己には厳しく、会社を止める事は自分自身に負ける事だと、会社と仕事にたいして、しがみついてきた私は、果してこれで良かったのか複雑な気持ちになります。やっぱり私は大抵者と云われればならぬでしょうが、その弊野危がどんどんであったが、到底理解して貰えないうし、又説明する気にも

目りまじんが兎に角つらいものでした。

山へども行けば少しは退屈する人が少く  
居るだろうが、最初はそんな見方から会社の  
人を一生懸命誘ったのです。今度の日曜日、  
山へ行かれると一週同乗乗り、この日の日曜  
日、山へ行つて来たんだと一週同乗乗り。つ  
まり二週間に一度は山へ登掛ける計算に居る  
のです。山では決して会社の話ばしらない水  
がマミーと私との雑音の内の雑音だったのです。  
山あつた来ばこそ今日の私ここにあり、苦  
しい会社生活あつたればこそ山を慕う私ここ  
にあり。

つまり私が言いたいのはワシマン上司の会  
社に勤めていたからこそ、山より以上に愛  
する私があるべきかけに居ったと言う事です。

伝票とソロバンとお金とにうめつてきてき  
たこの六年間、いっまでも古狸びでんと構え  
ていてははいけいといと座わりつけに椅子を  
に開けまじました。一日としてストツプが許

さぬ仕事は、例え好きでも山と言えども会社  
を休む勇気は、私に与えてはくれずかつにの  
です。

止むを得ず仕事オ一主義にっ私もこれか  
らは山優先へ切り換えられていくでしょう。  
会社を休んで山を歩くのは穴に伏く、仕事を  
怠れ山を満喫出来るようにやつと私に私  
はつまり、若くはないという事でしようが。

当時は必死にっ会社生活も今は平穩に、  
そして乗りつめに見守るに仕事からも解放  
されて、机の上に例会プレゼント交換でもう  
っ大のマスコットと山の写真を飾って時々  
眺め、楽しんで居る仕事ましている毎日です。



新祥に 突まっに野山を  
散歩する時

私は満足するでしよら

その眩しいほどの 緑の中に

生命力に溢れる 山々の目覚めを

感じる事が 出来るから

谷間に流れる 雪解水に

手を ひたした時

私は満足するでしよら

私のこらえてきた 苦しみ

寂しさも ゼッと流れてくから

静まりかえった腹に 立っに時

私は満足するでしよら

山は大きく 抱擁してくから





山  
ご  
バ  
ラ  
ム  
ということ

久保田 治

山登りは苦しい。しかし本当の登山の喜びとは、苦しければ苦しい程、それを克服した時に得る喜びにあると思ふ。大休登山とは一般の人で登れない所に登って来たから、自己満足出来るのであって、その山がどんなに素晴らしい山であつても、誰でもが簡単に登れる山であつたら、それはど層敷も嬉しきもない。だから苦しい山程、ある面では満足感も強いし、登山者が皆無だという山行は特に忘れがたい。

最近支部に入会された、ベテラン新人のYさん。彼女が群に強い。(と云ふ)。これはが日りに重傷では日かろうかと思ふ。要するに

足力の持ち方であるが、彼女がつかない所は皆もが日りに強い苦である。只その苦しさを態度に表わすかどうか。彼女の場合、大変素直に態度におしてパンゼイしてしまふ、でも突険には苦しい。と云つてが日りに足力はするが、のびてしまつたのは一度も息に事がない。だから自己暗示に力をつけてしまふのぞは日かろうか。あゝもう私は駄目だと思つてしまふのである。

夏のアルプス縦走では大きなキスリングを背負い、夢遊病者のようにリーダーの声に従つて、只黙々と歩いていく、残りのパーティーを見に、目はウツロで最早体刀を消耗し尽し、只足力だけで歩いていく登山者。その山行は好きで選んで仕立てておくとしても、支部山行位は疎張ってほしい。それには先ず自信をつける事である。サブザックは一時は休まずに歩く。ピッチは遅くてもがまかむい。(ピッチを早くしければ単独登山も多くやり得る。五石分の一の地図とガイド

フックを掛くマサマサ、大抵は皆を行くが、  
も、カハラヒシナの早い山行が出来る皆で可  
し。

どん底に苦しくとも忍耐刀まつける事。そ  
して大まき山行を、それも苦しい山をやらば  
、あゝあの時は頑張った。あの山に登れたの  
だからこの位の山は頑張れると、その次の山  
行から前の苦しい山行が、大まき心の文えと  
して慰む筈である。そして一奮苦しい時は、  
一緒に登っている仲間も苦しいので、誰かく  
たば水と折る事だ。一人ぼてればうんと楽に  
走る。(マスリングを指さすところの場合に別  
でガ) ぼてば良い最も良い方法と言えば毎日  
欠かすランニング又は縄飛びをする事であ  
る。これをすれば体力がつかう事は勿論である  
が(スタイルも好ましくない) 登りの苦し  
い時に 私はずいぶんランニングをしているの  
だ、他の人に負ける訳がよい。と強い自信に  
はり絶対山には強くなる。それから出来れば  
月、一回の山行を行わなければならない。

私の場合、体力は人並より大分劣っていた  
と思う。何しろ學校の成績は音楽と体育が大  
の苦手で、成績も振替悪かった。特に運動会  
は大嫌いであった。だから自分の体力には少  
からず劣等感を持っていた。とても登山は  
て私には合わないと思っていたのである。そ  
れがヒョン事から富士山に登る事になり、  
雲海の上に立つた山の持つ神秘的な魅力にと  
りつかれてしまったのである。それから山へ  
登る度にバテバテである。あゝもう山はな  
やのだとその時は思うが、登ってしまえば喉  
もと渴ぎれば熱さものとわが通り、家へ帰  
り三日もすれば、又ぞう山へ行きたくはな  
らなう。そして現在も走いては不便という  
事である。

昨年の山行では我々がきつかった。暑  
みには全く強い私にとつて死ぬ思いであった。  
高い交通費を付けてきたという事と吉岡さん

斎藤さんには負けられぬという意地もあつたが、何にもまして念願の山であつたという事、何が何でも登りにいという気持がダウンせずに登山にのびと思ふ。あとに返つて吉岡さんから茅草岳の時、「久保田さんはさすがに男だと思つた。」と云はれて喜んでよいのか悲しんでよいのが妙旨だであつた。私が行っている山行では、男性も女性も体力差はそれ程旨いと思ふ。重荷を背負つても私よりほるかに強い女性を何人も見ている。矢張り危折の折ちようでは旨いだろうか。

何年か前の谷川連峰仙の倉岳で男性三人亡くつたのに女性一人は生還したという、有名な遭難事件があつた。折にスピードは別とすれば耐久力は、時として女性の方が上ではないだろうか。そして登山とはスピードよりも耐久力の方がほるかに大切だと思はれるから。(但し相場の場合は特別に人を除けばやはり女性が強いと云う)

はがらすも守門は斎藤さんとアベックに居

つた。11月だというのに全国的に大変先急の高いい日と有り、暑くて足が重くピッチがあがり旨い。いよいよ肩に着きあと山頂迄五十介。これが意外とキビシクつた。私も途中で一本にてるつもりだったが、歩いていっているうちに面倒にほり、一ピッチで登つてしまふと覚悟をきめた。斎藤さんも(彼女、坂多に男西まはかほい)が有りづけていられるらしく、参つた。之直然し日だら登つていく。休もうと言おうもの言ら、にちまち座り込んでしまひそうであつた。でもほんとが一ピッチで至りきつてしまふと、あゝ頼むと言ふ。ほんと云えばどうにも旨いので登山にんだったら途中でブツブツ云はるければ良かったと言つて、しきりに残念がつていた。途中まで歩いて、これは私が休もうと言ひ旨いと思つて覚悟をきめたという事だつた。実際は私も途中で斎藤



さんげばて、腰こらんでくればよいがと、内心願っていたのだが……。矢張りアベックで行って、野郎が先このびたのびたでは全くコマに居らばいから。

最近、特にN嬢の衰えが目立つ。新しい人にはNさんで全く知らしげいと思っている人もあろうかと思うから、彼女の名誉の爲にも言っておくが、以前は斗士満々、特に立山から栗俣岳へ縦走した時のファイトは素晴らしい。これは体力の衰えでは無く、足元の内線だと思ふ。少し疲れてくるとすぐ「ヤメタ」である。歩かれば歩けるのだが。

今年の1月在久の茂采山→四方原山→御座山へ行つた。Nさんを含めて総勢六人。茂采山で例の如く彼女「ヤメタ」ときた。セ「かくこ」近登ったのに、先に降りてしまつたのは非常に残念ではあるが、高峰スキー場で滑って行くという事なので、別れたのである。

私達は予定通り、四方原山から鶴泊地白岩の部落へと降りたのであった。ところがどこかこい、Nさん小詰でピフテキを喰べ、エネルギーを補給して白岩へお先に到着していたのである。皆再会を喜び、翌日、御座山へと向つた。しかし又々途中迄登って「ヤメタ」ときむのである。私も最近の彼女の足元の衰えは、目にあまるものがあり、もしこゝで又先を下るようでは、もういゝ山には彼女と登る機会は今も残ってしまふに違いない。何事も共に飯盆の飯を喰ひ、苦勞して来たのに、仲四王失うのは、何とも寂しい。彼女だって御座山へは登りたくて来たのだろう。これは一番、何が存んでも登らば思つたと思つた訳である。そこでハッパをかけた。

曰く「今日は何が存んでも登る」「死んだらモリで登れ」「ベテランだと思つたら我がま」が出るのだ。今日も新人のつもりで歩け、「ガツクガ重かつたらサイフだけ持って、あとは捨て」しませぬ」「大に居つても歩け」

「金崎はんぞおちんちんから歩いてゐるのとは訊  
け連うぞ」小鶴にピフテキを喰べに来たの  
くは目い「ッブツ／＼言うな、今は歩く事に  
だけ専念しろ……」。おはんの事は目い、彼  
女ちやんと歩き通してしまつた。いつもは神  
経痛の出る下りも快調なものであつた。特  
に里道へ出てからの活躍ぶりは目い、ましいも  
ので、あのフアイトの半介も昨日出してく  
たらという聲がまだ響く。

「まだに足力である。それが狸曰の飲み過ぎ  
だとか、おんと言つては休んでしまふ。通  
飲んで歩け居く居るようだったら、おはんが  
止めてしまえばいいのである。酒を飲んでも  
ちやんと歩ける人も多勢いる。取手野さんや  
、理役では石井さん居んが立派なものである。  
山を止めてお飲みにかゝたら、それは最早  
墮落以外の何物でもない。

今回の山行で足力さえあれば、まだ十  
介歩けるという事を知つたに違いない。Nヤ  
ん、頼むくば「私の斗志はまだ健在です」と

言つて目しい。そしてこの後、出来る限り長  
く支那の仲間を連れて山野を抜渉する事だ。



# 花

## 足立久子

が花屋さんの店先を通ると、ふと足止の  
させられる。最近はずんずん花々の花が  
ある。一息にきえたいような名前のもも。  
じりの中の一輪の花も又、目ざぐるしい我々  
の生活に垂まらえなくも。

花け人の心ざどんちん荒んでいり所でも犬  
して険しいものには見えぬ。誰の心にも優  
れさせない起こさせてくもる。

花壇を作る場所も少くもり植木鉢を買っ  
てきて細やかに箱庭を築んでいり昨日、  
私の小さい頃には裏の山へ出掛けの指草をす  
るのには年中行事。春にはその為毎日曜日が家  
中のハイキング日とほっていた。

薙びも女の子だからおきくごんが多い。三

凡ゆる草花の色と、お花摘みも、スワッ午にも  
御馳走とほった。お花摘みも、スワッ午にも  
栗山は絶好の場所だ。

五年程前、夏の高原を少し一面のお花畑に  
埋もれてラッとしていたことがあった。  
このお花畑はもう遠か昔のことに行つてしま  
つた。近頃は野原とか畦道なんて知らぬ子  
さえあるという。

時々考えこまう。花も生き物、自然に咲  
く姿を眺め楽しむものなのだから、それとも切花  
にして部屋に飾つても、おきくごんのお馳走  
にほつても良いのだから……

おむといふ葉っぱ、言葉が無くもつてしま  
わたい内に一年中お花が絶えることのおい  
い広い庭が欲しいと……



# 私が初めて登つた山は

脇 美苑子

私が初めて登つた山らしい山は、友人と二人で行つた八幡平である。もゞこの山王選んだのだけは、思ひ出せぬ。でもこんどに楽しんで、苦ししい山は百かつた。何しろ歩き方も早く登ろうと必死に歩いたので、一週間は身体中痛くて痛くてたまらなかつた。それに、泊つた宿は国民宿舎であつたのだが、最期に泊つた宿舎がものすごく朝早く、朝起きたら着のまわりほどが赤く腫れが中心事々々。どうやら雨虫が。あゝ思ひ出して、

もう下りたくなく帰つてしまふ。だからから、下りてしまふとすぐに次の山行の事を考え、毎日苦悶が毎日。

毎日行つていゝ、と思つてゐる内に一年半もの歳月が過ぎてしまつた。そんなある日、本屋で初めて新ハイの存在を知つた。けつがこういふクラブを見つけたら入会しようと思つていたものの、適当なのが見つからなかつたのである。本を讀むと仲々よまゝころがある。さつやく入会する事にしたが、いざ布を開けたら足りぬ。仕方ないので二月程にめて、そこがら入会した。

新ハイ入会後初めて行つた所は、本部のスキーセミナーで乗るである。けつ一人だけ配られたが、結構そんな人がいてすぐに友達が出来た。又、スキーもへたながら何とか滑れる様に行つた。とても楽しかつた。新ハイに入つてよかつたはあと思つた。

それより支部に入つたのは四月である。支部に入つて初めて行つた山行は七面山である。八幡平以来久しぶりの山登りだったし、上に着くまでは登りばかりだった力で相当きつかつた。でも、万天丸もあまり良くは行かつたけれど、帰り頃には雪がチラついていて、ちよつぱりロマンチックな感じもして、とても楽しかつたです。おかげでますます山が好きになつてしまつた。

今では例会に行くたびに、今度はどうなる山行があるか楽しみにしてある。これからも、体力、健康増進の爲、又ストレス解消、その他諸々の爲にも、月一回は行くつもりでいます。皆さん、よろしく!!





山の頂を隠していらぬ海がらぎれる

・山の夜明けだ、

ニお山男も雷鳥も樹々も 皆目まを覚し  
まして自然の美を この目にくまきりと燃付け  
今日も一日 ガルぼうろごほはいか

山男さ

一歩くく山の土を力強く踏みしめて

頂上めやれ 登つて行こう、

バリエーションルートがたとえ目の前に

広がっていても 頂付けいで遊まくいしほり山に勝とら

醫鳥さ

今日も一日 元気に山男達と樹々達を見守つていてくれ

樹々達よ

誇りをもつて 雨の日も風の日も嵐雪の日も

負けずに ギャレリと立っていてくれ

その力強さと美しい緑で 山男の苦しい足はやわらぐのだ

ヤガて西の空に 真赤ないくすの光の光サ

消えてゆく所 山は赤い／＼眠りに入る

まして私も、山の険しい姿と 静かに沈みゆく

太陽の暖い姿にまきれ やすらやほ眠りに入るにらら



# 新ハイに入会して

内田 栄三

年月の経つのは早いもの、横濱支部に古岡  
信子さんの紹介で入会してはら二時半に  
しましました。喜びも悲しみも支部と共に  
はちよつとオーバーですが、私の庄右の一派  
として過ごして来ました、参加した山行は、  
支部及び個人山行を含めて、私の年令を  
かにかへていふと思ひます。そして今、過  
去の山行を振り返りてみて記憶に残っている  
こと等書いておきたいと思ひます。

まず最初、それは愛、天蓋りでした。湯  
は丹次郎の湯次郎式。わらじを履いての水  
の戯れというより戦い。私のがよゆい足  
がいつまでも震えていました。け。

そして冬。夏はスズランの名所である入  
山ですが、雪が全体をおおつていつまうに  
荘厳さを加えていました。冷たい冬の風がセ  
ーターのすきまから入りこんで、私を震えさ  
せます。サクサクという地よい雪の感触を覚  
えたいのはこの時、オーバーシューズを履いた  
のもこの時。

急が未きました。5月の連休には奥秩父。初  
のての縦走。先輩からキスリングを借り、シ  
ラフを借り、何もかも借りて身一つとお金だ  
けが白分のもので参加した山。キスリングの  
あまりの重さに家から戻りて歩くのに苦勞さ  
せられ、一晩引き返えたらかと思ひました  
ことのある山行。しかし山の楽しさは縦走に  
あるといふことを知ったのもこの山行でした。  
成雪を踏みしめる心よさはいつまでも心に  
残っている宝物。

そして夏、まことに待つに夏山山行。登山靴を興いこの時のために鍛えておいた体。行く先は白根三山、三日四日、広河原から北岳を望んだ時の心細きは、まるでアリゲ富士山を登る心遣でした。しかし一歩一歩の小々は歩みはついに三千メートルの山頂に立つことが出来ました。この時の感救、あはれにはわがまひしう。

そして夏山が終った後も勢が止まらずに、あの山、この山と出かけ、新宿駅や上野駅がオニの我が家のような足がしだいし、町で登山券の人を見つけるとじつと愛恋のよい笑顔を投げかけたりする私。山の良さをいつもくどくどと両親や友達に語り、相手がうんざりしていても見がたつてもしほいでしゃべり続ける私。そして山にお金をかけ、早寝になつて羊服が少ししか無いのをちよつと後悔している現在の私と、まあ山と共に青春を過して後悔して百い私の足持を誓いたつてモリですが。



# 魅せらぬ山

佐々木 美智子

『ゴットン・ゴットン』と、いつもながら小足味良いリズムをくずさず走る夜汽車。そのシートに身をあずけて、車窓より後方行く夜景をぼんやりと眺めながら、鼻唄でも口ずさみ、楽しがったその時の山行を回想してある時、私達は山を歩く楽しさ、素晴らしさ、歩ける仕合わせ、『歩いて来たんだなあ』という喜び、満足を再認識するのはよいでしょう。ただ、足が疲れだるほど走るとの距離は離れるというのに、時向がたてばたつほど満足度は脚を一層にし、その山の印象を鮮かに思いおこす事が出来るのですもの。

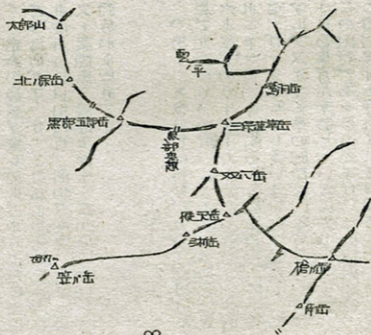
今までの私は、行って来た山の善し悪しを天覧によつて区別して来ました。どういう事かと書えば、雨に降られれば、ガスって景色が

見えなければ、これすらゆち悪き山、天気がよく、充分の展望が楽しめればすばらしい山だったのです。が、この私の自論を変えなければならぬ山行が、昭和44年夏、北アルプス、葉師岳と黒部五郎岳を登る山に於いて、行方ぬれにです。

『あ、又今日も雨降りはなあ。今日は小屋で沈没にしようか。』入山三日目の朝、双六小屋でのリーダーの言葉に、『今日こそは晴れて下さい。』と祈るような足音に、『私達は、ガツガツしてしましました。』思えば、北アルプスを歩く事四回目にして、その神髄に小れる事が出来ると、いさいで出かけた来たこの山行であったのですが、一日目葉師岳、二日目黒部五郎岳と、その期待はみごとに裏

却られてしまいました。重苦しいグレーのベ  
ールは、とう／＼とそれらを残さからの素晴らしい  
展望を、隠し通してしまつたのです。しか  
し、この山行を計画したオーの目的は、笠ヶ  
岳に行く事にあつた私達です。この天気に笠  
に行つても、その素晴らしい景色に味ゆう事  
が出来ようも無いと思ひながら、六時過ぎ  
に双六の小屋を後にしたので。

双六小屋は、穂ヶ岳、三保蓮草岳、笠ヶ岳  
への縦走路の三又路上にあります。さすがに  
槍ヶ岳へ向う登山道は、ソロソロと人の列で  
したが、我々が行く笠ヶ岳への登山道に足  
向ける人は少いようです。大小さまざまの  
テントが張られた双六池は、小屋のすぐ裏手  
にポツンとありました。その先で道は二手に  
別れます。左は弓折岳を通り、大ノマ乗越へ  
。右は直越大ノマ乗越に下ります。笠ヶ岳に  
行く事と、共に乗し方にしては鏡平へは、  
前右の道を取るわけですが、標高はおよそ、  
槍ヶ岳さへ見えないうちにこの天気に、そこへ行





す。空の小屋からの日ノ出は最高だつたよ  
と云われたいのを聞いた事がありました。が、  
それ以来、私のおこがれの山は、槍ヶ岳であ  
り、おこがれの小屋は空の小屋だつたのです  
。その念願がかなえられた喜びと満足感、  
文章にしはくても、皆様には伝わらないと思  
います。

この山行を振り返つて見て感じに事付、世  
にも書いたように、山の善し悪しは、天気に  
よつて変わるのでは無いという事です。空ヶ  
岳のように、まわりの景色を一つも見る事が  
出来なくても、それはこれだけ私を楽しませ  
てくれたし、満足させてくれたのですから。  
良い山はいつ行つても良いのです。でも願  
わくばこの山頂で、三百六十度の大展望を楽  
しみたかったです。そして始めるように青  
く澄んだ青空のもとで、もう一度この山を仲  
つくりと、おじゆい后がら歩いてみたいと思  
います。私の今の心遣いです。







ゆくまで見入る。語る者もほく静かは一時を  
過ごした。

朝食をすまして二時迄。颯一ッの晴天  
、グイーングライドを登る。残雪の道は思っ  
たより歩きにくい。おまけに転んだらあの世  
行き、慎重に進む。お花畑の向を流れる冷た  
い水が美味しい。下を見たり足元を見たりで  
徳高小屋へ到着。前方には空々岳がバツチリ  
とすがは一万尺、風が冷たい。右に鳥沢左  
に奥橋高と八方美人に囲まれてゴキゲン。お  
まけに西穂に続く岩稜、ボインボインが豊か  
だ。歩みにくい鶴を伝わって三、九〇米の山  
頂に立った喜び、おにぎりと一緒に詰りにあしめ  
る。

前穂への道は岩と石。植物も盛衰だがあま  
り名前が知らない。(ヒヤマダイコンは私  
の仲間だから知っている)のんびり散歩はカ  
で人より遅く行く。分岐点で少しがすがが  
り有志のみ前穂往復。

で立って膝で突っまっている。ヤツとの思いで小  
屋に着いたが、休憩しただけで上高地へと急  
ぐ。中曰小屋予約の為、男性二人に先花して  
もらい、ゆるやかに下りて歌を唄い、お喋り  
をしていたら、広い上高地への道に出た。所  
にゴゴロ／＼と雷の音がする。夕暮、中曰小  
屋に着く。早速食事。空腹を癒したし熱い風呂  
に入り、夜の散歩。河童橋で冷たいビールの  
うまがったこと。

三日目又もヤツ天  
朝食をすまし、出  
可物を出して出程、  
焼店に向う。夜露に

ぬれに遊歩道、小鳥  
達の合場にゆきほれ  
る。梓川のせせらぎ  
の音、まったく足行  
良い朝だ。ソグザグ



すごい暑さ、大が古ま出して歩くようだ。中  
 尾峠に立派な小屋が建っている。男性三人は  
 焼岳山頂へ向う。女性三人は硫黄岳で昼寝。  
 スカート等あり、履靴ありでまるで観音地の  
 賑わいである。ラーメンを作って男性三人を  
 待つ。しばらくしてお腹がへつ。今にも倒れ  
 ころに死んで来た。ラーメン作りましかし  
 女性三人で下る。タクシー予約が三時半の  
 でまだ時間はある。土産物を買ひ、愛の上高  
 地を楽しむ。三時三十分全員集合。生憎一方  
 通行の爲、五時五十分迄下れないので食堂で  
 無事と乾杯。



# 奥から西へ

中村 嘉宏

残ったの岩峰を越えて西穂の頂上に立った時、漸く緊乗感から解放された。これから先独標まで、大小のピークを越えぬげらぎ、まだまだ油断は禁物であったけれども、その位のことにはもうあまり足打の上で負担には耐えられた。今朝あれほど良かった天気もそろそろガスが湧き出し始めている。振り返れば越えて来た岩峰群が、湧き上がるガスの中に残空にも階段状に連なり合っていて、見上げる途が彼方のジヤングラム、奥穂まで続いていた。来て良かった。と思った。申し掛かって来る様な迫力のある光景を目の前にして、暫らくはただもう念願を果した満足感に浸っていた。

戻った。あの連続する鋭い岩の稜線に強い魅力を感じ、いつか歩いて見たいと思っていた。しかし毎回は決心がつかない。岩がもろく奇石もあつたりして、かたりの難コースと告げられていたからである。しかし実際は思ったよりコースは整備されていて、期待通り快いスリルを享受することが出来た。

今年の夏、すっかり準備を終えて待機していたが天候が思わしく無いので、思い切つて秋まで延期した。秋に決まつて一奮の向嶽は防寒対策だった。又、天候悪化に依る危険性は夏山の場合とは比較にならないほど追加するし、日も短い。全コースはほとんど岩稜地帯なので、荷は本来のだけ小さく軽くと思つたが、天候悪化その他で途中の天狗のツルの遊蕩小屋に泊る場合を考えると、シラフとエア

奥穂から西穂への縦走は、私の予ての念願

マツトそれには食糧は充分に持つて行くことにした。幸い好天だったので奥山間は何事もなく通過出来たが、この準備は別の所では非常に役立った。

碓石連休の初日10月10日、上高地へ通じる道筋は押しかけに車で大混乱して来て、バスが予定通り動かず、午後二時過ぎ、新やく上高地バスターミナルに着く始末で、やむを得ず橋尾小屋泊りにすることにした。ところが小屋は予定を変更した登山客の避難小屋（黒村）とても泊れず、近くの冬季用避難小屋（黒村）に泊る明日に回った。次の日、碓高岳山荘でも埒が複雑で部屋に入らず、食堂の片隅でミラフに寄り込んで、一夜を明かしたのであった。

折請、安全限界について今回ほど計画の段階から、そして山に来てからも考えた山行は今までに無いと思つた。橋高岳山荘の夜、ミ

ラフの中で明日の予定について述べていた。少し前から寝が覚めたが、脚痛もする。病室で整理がつかず、寒い土間で氷の向付さ小川のガレウがかったらしい。それにしててもこの二日間の睡眠不足で大分疲れている様だった。北碓南稜の後半、ヤケに苦しがつたことが思い出された。無理するのはよさう。そんな危殆が強かった。それに今日まで天気が良かったことも天心を氣にさせていた。けさ、小屋を出る時に雲さに震え目がら見にすてい聖空。明日方の空に朝日を浴びて行く輝やいていた南岳。翌日の紅葉黄葉。青空を背にして並ぶ橋高の峰々を眺めながらのヒュツテとの朝食。気分爽快だった。夕映えの雲海に多分が面橋山稜の黒い峰々。そして迴式岳頂上で見た真紅の落日。あす、前橋を経て岳沢を下ったとしても左分危行だった。

翌日、五時、周囲の物音が目覚ましに、良く眠れた様だった。避難小屋の部屋の中ではもうはいがなれと思つた。休日は意外なほど

回復していた。小屋を出る時まで今日の予定は決まっていた。しかし朝日に映える美しい斑々岳を右に見ながら、一息で奥穂積の上に着いた時、ほっそり夫じがいた。空は良く晴れていた。文字通り30度の展望は雲海の上に果しなく広がっていた。大兄は冷たく爽やかだった。武者ぶるいする思いで西穂へのオーストリアを踏んだ。

昇る日の朝、バスターミナルの屋上に立つて日を受け、淡紅色に染った裸走路を見下すごく懐かしい思いがした。

### コースタイム

10月10日、バスターミナル(14:00)→14:50)

↓種尾(17:30)

11日、種尾(4:30)→洞式エニツテ

(7:45)→8:45)→北穂(12:05)

(13:00)→洞式岳(16:00)→17:30)

↓穂高岳山荘(17:50)

12日、山荘(6:30)→奥穂(7:00)

(7:30)→ジャンタルム(8:15)

↓天狗の洞(9:40)→10:05)

↓洞、岳(11:10)→西馬(12:10)

10:15)→15:15)→

西穂山荘(15:05)→15:30)

木村小屋(17:30)

13日、バスターミナル(8:15)



# 三千メートルの足跡

関野 昌

煙とニワトリと鹿は高いところに登るとか言われています。それ（鹿）に比例して、高い山に棲きました。そうまはは三千木級の山です。

日本には三千木以上の山は北アルプス（ハルアルプス（北））、それに駒ヶ岳、不肖御岳と計三あります。

昭和30年7月、初めての三千木は中尾温泉から登る通称表銀座といわれるコースまどり駒ヶ岳へ。初めての北アルプスの展望は素晴らしい、すっきり山のトリコに感々してしまいました。

昭和31年6月、南アルプス仙丈岳へ、梅雨の中休み、汽車も山も空いていてとても気持ち良い二人だけの山でした。高山植物にいくら

か興味も覚えはじめた。

31年7月、南アルプスの白根三山へ。初日雨に降られ、北山尾根に取付く予定だったが自根御座のコースに変更する。素晴らしい登りにバテ気味で先が心配だったが曇日は天候と同じで元気よく北岳・御座を通り霧シヨンの西麓鳥、鷹島と通過する。

41年5月、南アルプス塩見岳へ。5日の三十米はラッパとショパイガと思っただが、ロストン時ので心配はあまりなかった。山伏峠からの塩見峠、遂に駒ヶ岳、仙丈ガスといつかもやというが、ヒョコリ頭を出し幻想的風景であった。あのよう風景は二度と見ることは出来まいであらう。

41年7月、南アルプス南群へ、40年の夏に予定していたのが盲腸の爲、ひと夏痔に振つてしまふ。

この南群縦走は三十米と担うものにとつては、最もつらいところである。

一曰目、前山を越えて山の谷あいの中にある二軒小屋に着く。

二曰目、いよいよ東岳の取付、東岳のお花畑はきれいである。中岳、前岳を通り荒川小屋へ。

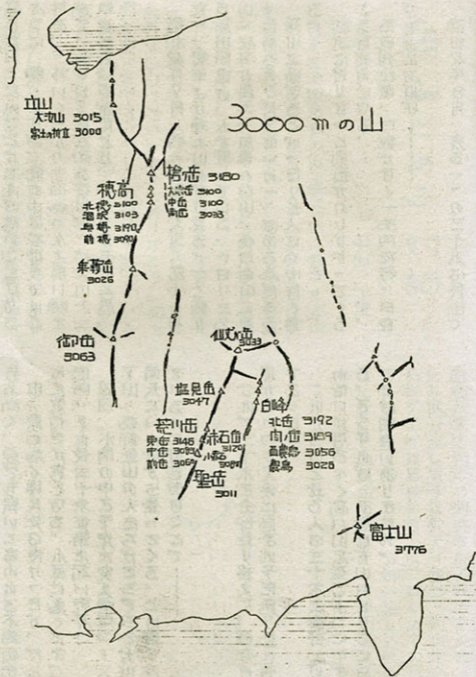
三曰目、小赤石、赤石を越え、兜岳あじりぞり立ち。アツと言つ向に趾の中で足が泳ぐ。田舎が路上で鳴る。蘆薈小屋で雨降り乍、大雨の中を聖のまして登る。一歩く、苦しい登り、休んでいる方が多い。同行の二人に大介迷惑をかけ。聖を越え下りになつた時には生々返つて死行である。人生も苦ければ乗ありとつて、翌日ひのんびりと、南アルプス随一のお花畑を見て下る。夜に素晴らしいお花畑であつた。

41年8月、北アルプス槍——穂高へ。この縦走路には、大喰・中・南・北穂・羽天・奥穂・前穂と七峠もひしめきあつてゐる。

必本からタクシード上高地に入る。夜行幾川の爲、肩の小屋に着くとガックリ。山尻していいキレットも難く通ぬ。昼には穂高小屋に着く。翌日序り尾根から前穂へ。北穂、奥穂、前穂に続く稜線から、より峠の区みだいで道次小屋にかけ素晴らしい眺めである。岳次から上高地へ。すぐ乗鞍行のバスに乗りに乗鞍へ。乗鞍山頂から尾根高は大分遠くに見える。朝はきだあの頂にいたのに。

昭和42年7月、世丹的に有名なフジヤマへ。今夏最高の人出とがでた台目あたりから人のラッシュ、まるで通勤ラッシュそのものである。さすが人の出も日本一の山である。

お栓を回つて御殿場口を下る。砂走りは一歩足を止すと三歩位、ザーと進む。毎かく





感じ良い。良いことがあれば悪いこと、があるように、顔・エリ首、靴の中ほど砂まみれとける。一杯いくらかの洗面器の水を真い顔ま先う。誰がいったか知らずいが、富士山を二回登る者は馬鹿だとか、ごもつともだと思つた。

昭和42年7月 剣・立山（大町、富士の町  
女）・室堂より争土山めがけ登る。一ノ越から  
雄山周辺は、人で荒んでいる。やはり三名  
山（後町の富士、加賀の白山・後日、白山に登  
った時こそうだった）の一ツであるゆえだろう。  
雄山ま過ぎるとばつぱりと人に合ひ行く。

剣式に降り立つと剣岳ガのしかかってくる  
ようす結構になる。

翌日剣往復、日教が早く一泊内夜行。日教  
がマントあれば……

昭和42年8月、残る一ツの三千米は民謡で

も名高く、夏でも賢いと言われる木島御岳へ。  
田ノ原に着く頃天気は良かったが、だんだ  
んと雲行きが悪くなる。小屋に着くとすごい  
雷雨・夕食後三千米征覇を祝ひ乾杯。  
翌日、小雨の中を予定を変え最難コースと  
下山・鳥御登山の人たちガぞろぞろとお山は  
晴天といいながら登ってくる。上は雨が降っ  
ているのに釘苦勞なこと……

これで三千米を全部登り終えた。自分自身  
遅が良いのか天候に感ずれ予定通り登山満足  
であった。

これから山を登る人は三千米を全部とはい  
われないがなるべく高い山を登るようにすべ  
る。そうすれば、あまたも山のとりこになる  
ことは自違いありません。

# 白山とある 対話

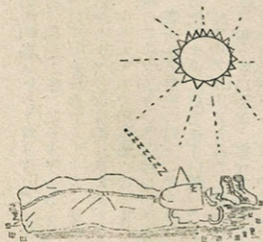
中山 一重

日本三名山信仰の山加算白山に登ることにした。予定していたボーイフレンドが行けず単独である。台風が来るのにわざ／＼行けずく、とても思っにガどうしても行く決心は堅く急行、趣向して上野まで。

「お兄さん冷たいお肌はどうですか」お兄さんと言われましてあたりを見回した。ガ、どうも白介らしい。「いやどうも有り難う」因々しく食パン。オ、カリ兄宛外で暮る。トランプをエヒリ身の上訃事で、夜の明けりまで賑々、夜女産と高岡で別れる。

いよいよ金天尺。スタイルを直し、トイレで着替えて、練馬スタイルで金沢花白山下、

直前バスで行く。物好き百人二十人位、今にも降り出しそらと天である。別当出合からシグザクは急登と白った。それこそ単独の青年が「よろしかつたら御一語して呉れませんか」と器具合で変んてこぼり行着ま向える。



「ボク申却宮で仰いていきます。アンタはどこですか。ヨコハマの住人です。ヨコハマいいですよ。遊びに行ったら泊めてくれますか。」「羨しい家ですがどうぞ。分岐点まで私けふらくい言ひながら、早いピッチで歩いて行くのがヤツとである。」「アンタ先まで行って小屋の予約しておいてくればいいか、豊稔とゆつくり取り替りげうりながら。」「私の侍意の違ひ告げ。」「ボクゆつくり歩くからアンタのペースで行きます。」「再も降り見直し暗く残雪も豊富だ。お花畑もまだ咲いていい。」「日光キスげ仕りものである。晴れてくれれば素晴らしい景色であろう。」「

「ヨニーの迎で休んで食べようよ。」「えーとまだ一詩、あと二時間歩けば小屋だ、あせらず行こう。教パーティが急いで越して行く。」「地元のパーティの人ば。」「為達地方の人だ、この山は信仰の山で、味ゆいながら歩いた方がいよ。」「御座る有りがとう。」「じゃ小屋で行っているから一語に促しよう。」「ドゥモド

うて。

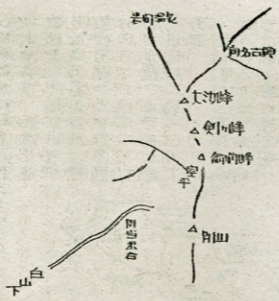
三時高坊に到着、ドシャ降りなので二段ベツトに入る。高坊と言つても木テルのように立派だ。」「いよいよ采戸ゆアンチャン一杯やりましよ。」「アンチャンには頭に来たのでグイグイ飲む。ウイスキー、日本酒、ビール、ポーカーで飽けてホク／＼。さあ寒しい夕食のタイムだ。期行して食堂に行つてガツカリ。かよよこの世でまこれに足るきずい飯。」「アンタ兵ッ子、どうりでズケ／＼言うと思つたよ。」「俺ヨコハマ知っているよ、墓げあつたら何して。」「巨かほ十尊架があつては。」「外人の墓ですよ。」「ミナトの話がはずあ。」「

朝、物ずで雨と風。折角采戸のだから原上土踏まはけれと昨夜の連中と行く。ボンナ。はお尻から乾かれてズボンほビツシヨリ、ヤツとの思いで奥院、頂上の味ゆいも早く下る。マアてもう一泊して天免侍ちまするか。」「ところガギツ。」「ンナ。」「ン天免予報言く。」「山

在群は大雨の恐れありトヤマトト下山し  
 ヲラ。地元の三人組と青年と川崎の娘さん（  
 私より年上です）砂防新道を下る。川崎の娘  
 さんは紅一点（？）唇ので私をいやらしい男  
 性と罵らうしく（最も私は女性唇ので親しく  
 話せる）しつこい人ゆえては態度である。  
 つい写真と取つたりして遅れ一語に辱ると  
 急いで逃げちやう。バスの中でアントタまで  
 休みあるのト、あと一曰残っているト、えん  
 后ら永平寺が能登半島へ行こうかト、えうゆ  
 えアナタに手かせるト、話は一致した。

地元の三人は兼六公園を案内してくれ  
 青年と駈て別れる。リュックをあずけて考  
 いのでお風呂に行くと、三十介ト、ヒラ出口  
 で待つていてゆくと川崎の娘さん、アントタ何  
 處迷いしているの私も一語に女風呂に入りま  
 すト、いやらしい人ゆト、此れでもレッキ  
 トレレレディ唇だが甘ート、ビックリして  
 私と大笑い。  
 湯上りのビールのみ。和歌と話合いの末、

前山城と後乗園を見て姫路城にとまする。夜  
 行で金沢にたつた。



# 樽が氷の山

鈴木国之

よい山とは仁に景色がよいとか、展望が  
きくとかいふ事だけではよく、その山の奥  
界における、その時の精神状態によつて左右  
されると思う。そしてその様子は、状態になり  
やすく、但つ速く離れたいに、登路が早く登  
ることが困難である様な山々を、僅す此の山  
とせばいい。

茶々岳（チヤチヤヌプリ）1872m 国後  
紀行も記録も皆いこの山に感心を持つて居  
る、知床の羅臼平を下る日の朝である。天幕  
を巻くと、雲海の上にチヤチヤヌプリがあり  
、可愛い魚が白い雲の上にちよこんと出てい

て、知床の自然と呼べるといふと変わらぬといふの  
る。国後島の北側にある  
この火山は、知床が時  
時以上に閉塞されつ  
ある事を考えると、原  
始性を保っていると思  
われるこの自然に、せ  
めて返還されたい時に  
訪ずればいいと思つて居  
るのである。

羅臼町から標津へ向  
かうバスから、壱の向  
方に暗く重い雲を被つ  
た国後が見え居る。その  
ン連嶺の島へ向かうか  
のように一隻の魚船が  
遠くに小さく見え居る。

そしていつかチヤチヤヌプリの山頂から、  
知床の山と蒼いオホーシツクの海を眺める日の  
ことを考えたい。



ペテリ山 1730m

田和の初め「透かせる山」として、初登頂までの北大山岳部の苦闘が刻ぎられている。この山は曰高山脈のほげ中穴にある。

円御山と共にこの山の名前は最も好きで、換に入る。カタカナの語感からくる異国情緒と花苗の響が特に好きだ。まういふ事もある。アボイと共に関心があった。曰高山の山の特色であるカールは山頂部十勝側にA・B・Cの三つを抱いていて、つい最近まで愛は悦しむ式で五人を寄せ付けられたのであるが、果尾根に道がつけられた。行かれる可能性が本て来た訳でもあるが、何んとなく寂しい気もする。いつまでも昔と変わらぬいまの山があっても良いのでは無いかと思ふは、ほげして白くまがりのエゴイズムであらうか。



丸山岳（会津）1009m

会津は高層温泉を併った山が多い、有名尾根は、原を重嶽に、会津駒、平ヶ岳、田代山、鬼ヶ岳など。

この丸山岳も山頂部は温泉とほってあり、青足尾登頂が百いのでほとんど人に寄せつけ

侍い。ニの山の記録もそれう試て二回レサ  
きだおめにかがった事は侍いが、ニッ共ガ侍  
リの日教正兼して登頂して侍いる。

春の残雪期、雪を利用して登れまう侍免サ  
する。シラビソの林をぬけると広大な雪原ガ  
本ガリ、ヤケて展望ガひらけると平ガ岳  
ヤ爐ガ岳、公津駒、浅草、倉名ニ山ほど見  
えてくる。空は青く澄んで、陽ざしは強く眩  
しい程だ。帰りはアイゼンをオレシエグリヒ  
ドで下れるだろう。

思いは馳せて還い曰、この山原に立ッ夢ガ  
限り侍く続くのである。



永田岳（屋久島）— 890m

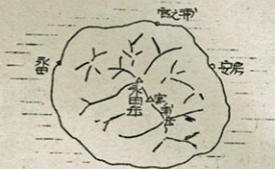
『昨日夜侍夢を見たり。屋久島の山へ登ッ  
たんだが、片側は雪がベローと付いて侍いるの  
に、もう片方は絆の草が一面に生えて侍いて、  
点々と高山植物も咲いて侍いた。』

『穴除にはまん侍事も無いだろうが、4月  
の終り近くまで雪が残るし、雪崩で遭難した  
こともあるんだ。いっかが行ッてみたいだ。』  
『ああ、離島と言ッたらヤッは文明の入り方ガ  
遅い性か、却ッて自然のもの形ガ崩れ  
ずに残るからゆ。』

『山原附近には花之江河や崖之元と言ッる名  
前の温泉やヤク形の衆生林もあるが、何と考  
ッても東支那海に若ッる夕陽はすばらしいだ  
ろう侍あ。』

何年か前の友人との会話である。その彼も  
今は名古屋に行ッていて、いッしに山へ行  
く事も出来なく侍ってしまッたが、二人の胸  
の、懐ガれる山、として、いッまでも有る侍  
い。

ニ此ら四ツの山以外では北からボロシリ岳  
 や狩場山、大千軒岳、和賀岳、鳥甲山、白砂  
 山、男鹿岳、毛勝岳、錫杖岳、霞沢岳、鹿ノ  
 岳、和名倉山、水ノ山、三輪山、嶺山、市原  
 山、湯野山………ほど。人の行かない山はに  
 くまんある。



情報化が進みすぎると複雑な社会構造となり、公営が地え、人向喪失と言われる。此からの生活にあって、働くことは善、遊ぶことは悪という概念から、遊びが日常での人向性優劣と見られ、ある現在、ニ此らの山々が少くてもこの当分、心の支えに暮るに違いない。





編集後記 & 雅感

☆昨年の終り頃から始めて、もう半年にわたってしまつた。時間がかりつた割合にはあんまりパーッとしたものが出来なくて残念だが、次回の人はガンバツてもうおう。

☆派から約15分歩いて運動している。ある日道路工事の関係で通り塞ぎました。その道は人通りも少なくて、空地があつて、レンゲやタンポポが点々と咲いていて、小さな草原状にまわっている。誰にも知らずにお花畑を見つけたように、毎日そこを通っている。もうすぐタンポポがツクワサに代り罌粟やススキに代るだろうと思ひながら。

☆この一年間の支那山行はどうだったかと言ふ向に對して、個人山行と支那山行とを比較して、人数が多い山行ではあるのかもしれない。でもどつちかという言葉も出る。

鈴木国文

どういふ試みか個人山行の方が印象に残っている事が多い様に、人数が多ければよいという考えにも疑問はあるが、メンパーの交換期を向えて、新しい人が新鮮な感覚で山行や例会をマンネリから引取りぬいてほしい。

☆この所の土曜日に雨が降っている。不思議と雨の日の方が、ガリ坊や印刷がほかどある。雨に降る新株が美しくなり、夏もすぐにある。異常気象の続くこの数年、今夏こそ天気の恵みは夏山にしたいものだ。

☆シダ、もろこし、山へ行く事だけで終る事はなく、何か書き残したいという気持ちも離れなると思ふ。文の拙悪はどの様でも構はない。

☆次号で起稿しなす。次号に期行したい。

S.H.C WORKMANA